

## 酒呑童子論序説

——自己否定と自己確認\*——

島内景二\*\*

### An Introduction to the Study of *Shuten-Dōji*

——Identification and Self-Negation——

Keiji SHIMAUCHI

#### Abstract

*"Shuten-Dōji" is one of the most famous works of Otogi-zōshi. This work involves a complicated process of development. But it can be made clear by analyses of following things; legend of Fujiwara-no-Chikata, the tale type of the Four Devas of Minamoto-no-Raikō, and the liquor called Jinben-Kidoku-Shu.*

*Everyone tries to identify himself through negation of his other self. "Shuten-Dōji" also has a motif of enmity against the other self.*

#### 1. はじめに

その最初の形態は、民族の精神に宿った一つの心性であった。それがダイナミックな古代神話として結晶し、やがて王朝人の心を強く揺さぶる美しい物語となった。そして、中世に到るや、心性は「物語」という枠を脱して再度「神話」という形態に憧れ始める。しかし、新たに出現した神話は、神話本来の均整のとれた姿ではなく、一種奇怪とも言うべき意匠を装っていた。その意匠に惑わされる者は、この怪物を産んだものがほかならぬ自分の心であることに思い至らない。この新しい神話を、我々は御伽草子と総称している。

御伽草子の諸作品は、すべてその来歴を古代神話から辿ることが可能である。だから、言うならば、発生と変容の軌跡を明らかにすることが、その作品の有する意味を確定する作業の第一歩なのである。にもかかわらず、その必要な作業は、これまで必ずしも十分にはなされていなかった。

本稿は、美女の生き血をすすり生肉をくらう希代の怪物・酒呑童子<sup>1)</sup>の物語の出自を確認しようとするものである。そのことによって、『酒呑童子』という特異な作品を産み出した日本人の情念の実態を照射したいと考えている。

さて、このような問題意識で作品の系譜を辿ろうとするとき有効なのは、話型の研究であると私には思われる。話型の分析は、意匠の仮面を剥ぎとり、同一の発想形式に属するすべての作品の共通性を照らし出す。その共通性を認識するところから私の研究は始まる。

#### 2. 藤原千方

##### 2.1 『酒呑童子』の中の千方説話

この世を支配している既存の権威に叛逆し、自分自身を最高峰とするもう一つのヒエラルキーを作ろうとする気骨を有している者が英雄となる。叛乱に成功した者は新しい王朝の始祖となるし、失敗した者は逆賊・謀反人の烙印を押されて抹殺されることとなる。

そのような悲劇的な末路を辿った謀反人の一人に、藤原千方なる人物がいる。その人生を、ひとまず『太平記』によって紹介しておく。

\* 昭和61年5月15日受理

\*\* 人文社会科学系列 文学研究室

1) 「酒天」「酒顛」「酒典」「酒伝」などの表記もあるが、本稿では「酒呑」で統一しておきたい。

又天智天皇ノ御宇ニ藤原千方ト云者有テ、金鬼・風鬼・水鬼・隱形鬼ト云四ノ鬼ヲ使ヘリ。金鬼ハ其身堅固ニシテ、矢ヲ射ルニ立ズ。風鬼ハ大風ヲ吹セテ、敵城ヲ吹破ル。水鬼ハ洪水ヲ流シテ、敵ヲ陸地ニ溺ス。隱形鬼ハ其形ヲ隠シテ、俄ニ敵ヲ拉<sup>トリモシク</sup>。斯ノ如ノ神変、凡夫ノ智力ヲ以テ可防ニ非ザレバ、伊賀・伊勢ノ両国、是ガ為ニ妨ラレテ王化ニ順フ者ナシ。爰ニ紀朝雄ト云ケル者、宣旨ヲ蒙テ彼国ニ下、一首ノ歌ヲ誦テ、鬼ノ中ヘゾ送ケル。

草モ木モ我大君ノ国ナレバイツクカ鬼ノ棲ナルベキ

四ノ鬼此歌ヲ見テ、「サテハ我等惡逆無道ノ臣ニ随テ、善政有徳ノ君ヲ背奉リケル事、天罰遁ルル処無リケリ。」トテ惣ニ四方ニ去テ失ニケレバ、千方勢ヒヲ失テ聽テ朝雄ニ討レニケリ。<sup>2)</sup>

四人の鬼神を駆使した藤原千方が、「天皇家」・「朝廷」という万世一系の不滅の権威に対抗して敗れ去った次第が記されている。その敗北の際の転機となったのが「草も木も…」の和歌であった、というのが大切で、この千方説話は歌徳説話の一つとして種々の歌学書に引用されることになる。

『太平記』とは別に、もう一つ『勢陽五鈴遺響』を引いておく。

相伝云、天智天皇朝ニ藤原千方將軍王命ニ叛キ、伊賀・伊勢ノ二州ニ横行ス。其居地、伊賀州高尾村ノ乾ニアリ。峰ヲ涉リテ本州一志郡庄内ノ郷ニ到テ城堡ヲ設営ミ、謀略ヲ以テ四鬼ヲ従ヒ、逆意アリ。紀朝臣友雄勅ヲ奉ジテ追討使ニ補セラレ、本州ニ下向シテ千方ヲ謀リ出シ、家城ノ瀬戸淵ニ射殺セリ。其首雲津川ヲ慕ヒ溯リテ飛行ス。探追フコト二十余町ニシテ得タリ。首ヲ始テ見タル処故ニ真見ト名ク。同郡真見村アリ。城堡ヲ築タル地ヲ城立ト称ス。其山上ニ字ヲ千方屋敷ト称スアリ。其額ヲ同郡八手俣ニ祀リテ、毎例十一月五日祭アリ。方俗君ノ祭ト称ス。其地ヲ君ガ野ト称ス。八手俣旧名旗本ト名ク。千

方將軍ノ旗本ト云意ナリ。其骸ハ雲津川ノ末流ニ至テ、川口ノ内上田ニ停ル。其地ニ葬埋ス。墓墳アリ。及石塔ヲ建ツ。俗伝勢陽雜記ニ所載ナリ<sup>3)</sup>。

北畠准后親房伊賀記曰、村上天皇の御宇に藤原千方正二位を聊か望みしに、その甲斐なかりければ、これを逆心して、日吉の神輿を取り奉り、三国がたけにとりこもり、千方にしたがふ処の山法師山注記三河坊兵庫の堅者筑紫坊この四人かれに従ふ。此山法師がちから大木をたふし勢ひ岩石を破るゆへに官軍多く討れて既に引退くべき処、討手の大將紀の朝雄六根清浄の中臣祓を誦して神功ならびなかりしにや、千方終に柳のもとに縊り果にき。其処を逆柳と申て、たゞ今東条が宅地のうらとおぼへたり。伊勢甲和郷にも遺跡あるなり。藤原千峰といふものゝ子にて、鎮守府將軍に至る云々。<sup>4)</sup>

「天智天皇」を「村上天皇」とする伝承の存在が知られる。いずれにしても、大化の改新や天暦の治の聖帝である。なお、「天智天皇」の時代とされるのは、一つには、天智の死後に「弘文」と「天武」の二つの朝廷の対立があったからであろう。「村上」とあるのは、新皇を詐称した平将門の乱と無関係ではあるまい<sup>5)</sup>。これらの点については、後述することになろう。

さて、渋川版『酒吞童子』には、次のような箇所がある。

(A) 「いかに頼光うけ給はれ。丹波国大江山には鬼神がすみてあたをなす。わが国なれば率土のうち、いづくに鬼神のすむべきぞ。いはんや間近きあたりにて、人を悩ますいはれなし。平げよ」との宣旨なり<sup>6)</sup>。

(B) 十人余りの鬼共が此よしを見るよりも、今は童子もましまさず、いづくをすみかとなすべきぞ、鬼の岩屋もくづれよと、おめき叫んでかゝりける<sup>7)</sup>。

この二箇所は、渋川版『酒吞童子』という作品の

2) 日本古典文学大系『太平記(2)』(後藤丹治・釜田喜三郎校注) 167~168 ページ。巻十六・日本朝敵ノ事。

3) 『勢陽五鈴遺響(3)』(三重県郷土資料刊行会・1976) 117 ページ。

4) 同前書・118 ページ。『太平記』の四鬼の正体を、四人の山法師だと説明するのが特異である。なお、千方の父とされる「千峰」は、『尊卑分脈』などに見出だすことができない。

5) 将門の乱が平定されたのは、天慶三年(西暦 940)。村上天皇の即位は天慶九年(西暦 946)。村上天皇の御宇に将門の乱がおこったわけではないが、時間的に近接しているのである。

6) 日本古典文学大系『御伽草子』(市古貞次校注) 363 ページ。

7) 同前書・381 ページ。

表現の中に残った、千方説話の微かな痕跡である。

『酒呑童子』のその他の諸本でも、やはり千方説話の影響が指摘できる。

(C) 土も木も、我大君の、国なれば、いづくか鬼の、宿とさだめん

(『酒呑童子(伊吹山)』)<sup>8)</sup>

大江山系の酒呑童子と並立関係にある(あるいは、前後関係にある)伊吹山系の酒呑童子に、「土も木も…」が引用されているのである。伊吹山系では、最澄の、

阿耨多羅三藐三菩提の仏たちわが立つ所に冥加あらせ給へ<sup>9)</sup>

という和歌の威力が語られることもあるが、ここでは「土も木も…」の歌で酒呑童子は山を追放される、千方説話そのままの歌徳説話なのである。

(D) 『大江山しゅてん童子(絵巻)』。源頼光が酒呑童子追討の宣旨を受けるにあたって、関白殿は千方の故事を披露する。人名は「ちかた」「きのあさを」、歌の形は「草も木も、わがおほきみの、国なれば、いづくかおにの、やどゝさだめん」である<sup>10)</sup>。これから行われるべき酒呑童子退治と千方退治とが重ねられているのだ。実際、頼光は、後に酒呑童子の配下の鬼に向かって次のように語りかける。

なんぞ、わうどに有ながら、わうめいを、そむきたてまつり、人みんをうしなひ、なやましけるぞや。

むかし、千かたといへる、ぎやくしんに、つかへし、おにも、わうめいの、そむきがたきをば、よくしりたればこそ、せんじをきゝわけて、こくうにさりうせぬ<sup>11)</sup>。

伊吹山系と同様に、大江山系においても千方説話が大きく影を落としているのである。

一体に、ある文学作品がそれより先行する事跡を取り込む際、そのレベルには深淺さまざまのものがあつた。ただの装飾にしかすぎないものもあれば、その作品の依拠した根源的な話型を指し示すものもある。

ろう。

では、『酒呑童子』と藤原千方はどうか。「土も木も…」の和歌が種々の場面で引用されているにとどまらず、作品全体の構造の一致も見うけられるのである。即ち、酒呑童子が「ほしくま童子・くま童子・とらくま童子・かね童子」という鬼の「四天王」を所有していた事実が、「四鬼」を持った藤原千方と重なるのだ。『酒呑童子』は、藤原千方説話を一つの源泉として発生した、あるいは、少くとも、『酒呑童子』は千方説話と同根の発想形式に依拠した物語である、ということが許されるであろう。

「土も木も…」の歌と『酒呑童子』の関係は、諸書で指摘されることはあつても、それらがなぜ結合しているのかという肝腎の問いかけはまだなされていないように私には思われる。それで、『酒呑童子』と千方説話の関係を鮮明にしてみたい。まず、千方説話そのものについて考察してみることにしよう。

## 2.2 千方説話とその拡がり

千方という固有名詞を出すにせよ出さぬにせよ、明らかに千方説話を引用しているものが、中世の文献には数多く存在する。それらの例を示しながら、この説話の形態について考察してゆくこととした。

まず、歌学書系統から調べてみよう。古今集の仮名序で「目に見えぬ鬼神をもあはれと思はせ」と高らかに宣言された和歌の徳ではあるが、中世の古今集注釈書は一見奇矯とも思われるこの歌徳を証明しようとして、数々の説話をあげる<sup>12)</sup>。その中の一つに、千方説話があるわけだ。

(1) 『三流抄』<sup>13)</sup>。『日本紀』に出典ありとして、藤原千方将軍が風鬼・水鬼・金鬼・一鬼の四人の鬼を使って、伊賀・伊勢の国で叛乱するが、紀朝雄中納言の「土も木もワガ大君ノ国ナレバ何クカ鬼ノ宿ト定メン」の歌によって鬼に去られ、金淵城で滅び去った、という筋を語る<sup>14)</sup>。

(2) 『頓阿序注』<sup>15)</sup>。「ちかた」という鬼(一説

8) 『室町時代物語大成(2)』376ページ。

9) 『新古今和歌集』巻二十・釈教・1920番歌(歌番号は、新編国歌大観による)。

10) 『室町時代物語大成(3)』144~145ページ。

11) 同前書・179ページ。

12) 注3書・119ページは、「或云、古今集序ニ、和歌ノ徳ヲ賞シテ、ちからをもいれずして天地をうごかし、目に見えぬおにがみもあはれとおもはせト、紀氏ノ所録ニ同ジ。ココニ拠テ、上古ヨリ妄譚ヲ設クモノ多シ」とある。千方説話と古今集の関連を指摘するものである。

13) 片桐洋一『中世古今集注釈書解題(2)』(赤尾照文堂・1973)228~229ページ。

14) 古今集関係では、東北大学蔵『古今秘決』にも千方説話が載る。ただし、歌の初句は「草も木も」である。

15) 注13書・299ページ。

に、四人の鬼を使う人間)を、「藤原朝臣」が「土も木も我大君の国なればいづくか鬼のすみかなるべき」という歌の徳で追い払う。紀朝雄と藤原千方を混同して「藤原朝臣」とするなど、本来の形が崩れてしまっている。

(3) 京都大学蔵『古今集抄』<sup>16)</sup>。冷泉家流の「持為」の説として、この話を引く。千方將軍が、一鬼・金鬼・風鬼・水鬼の四人の鬼を使って伊賀・伊勢両国を押領するが、文武の達人・紀友雄卿の「草も木も吾大君の国なればいづくか鬼の栖なるべき」の歌が原因で金淵城で滅んだ。

(4) 『和歌威徳物語』<sup>17)</sup>。天智天皇の御宇。藤原千方が、金鬼・風鬼・水鬼・隠形鬼を使う。紀朝雄の歌は、「草も木もわが大君の国なればいづくかおにのすみかなるべき」。これは、『太平記』そのままの形である。

次に、番外謡曲の世界を覗いてみる。謡曲は、それ以前の膨大な和歌・物語・説話群を強靱な咀嚼力で吸収して出来あがった雑食文化の所産である。謡曲の地味は驚くほど豊饒である。その謡曲に吸収された千方説話を観察してみよう。

(5) 『影山』<sup>18)</sup>。安部貞任討伐の命を蒙った源義家の臣・影山は、貞任秘蔵の名馬・鬼黒を生け捕った。これにより貞任の運命は極まったとして、千方の話が語られる。四人の鬼が「土も木も我大君の国なれば何くか鬼の宿と定めん」の歌によって「藤原朝臣」の味方に転じ、千方は滅びた、という。四人の鬼が勅命を帯びた正義の側に寝返ったことと、名馬鬼黒の移籍を等価のものとして捉えているわけである。注意されるのは、「紀朝雄」を「藤原朝臣」という崩れた形(『頓阿序注』と同じ)で表現している点。かつ、「天智天皇——藤原朝臣——千方」という人間関係は、本来「帝——義家(勅使)——貞任」と対応しているはずなのに、「義家——影山——貞任」とい

う構造へ転化している点。これによって天皇の影が薄くなり、勅命に背く者の滅亡という要素が弱められるのである。

(6) 『丸子』<sup>19)</sup>。用明天皇の第三皇子・丸子皇子は、推古天皇の命を受け、丹後国与謝郡「みうへが嶽」に住み、「でいこつちぐまかるやしや」という三鬼<sup>20)</sup>を大将とする数万の鬼神を退治する。この話の中に、

末は生野の果までも。末は生野の果までも。恵みにもれぬ土も木も。我大君の国なれば。いづくか鬼の。陰に宿らん。

と、「土も木も…」の歌が引用されている。鬼の数が三人であり、それを統率する叛逆者の名を出さないのが特徴である。かつ、「生野」によって酒吞童子の住む「大江山」が暗示されている点に注意せねばならない<sup>21)</sup>。

(7) 『諏訪』<sup>22)</sup>。九州長崎の諏訪社が舞台。異国から外道が来襲したが撃退された旨を語る。

されば。有難き時代なれば。普天の下。率土の内。何く王地にあらざらんや。土も木も我大君の国ぞとて。頓て退治し給へば。……

云々と、「土も木も…」が引用される。この話の最後で二匹の竜が干珠・満珠を勅使に献げる件りがある。高貴な人物の命を受けた者が竜宮城に到り宝珠を奪う(又は、貰う)という海人型の構造であるわけだが<sup>23)</sup>、その「帝——勅使——竜」という人物関係が、ほかならぬ千方説話において、「帝——勅使——叛逆者」という形で指摘できるという事実は、私の興味を湧かせる。千方説話の根は、広くて深い。

(8) 『煙巖山』<sup>24)</sup>。文武天皇の勅使・公能は、病に苦しむ帝を治療するように、煙巖山に住む理修仙人の下山を促す。仙人は、空を飛び都へ上り、不老不死の薬の壺を渡した。「帝——勅使——仙人」という三者の関係で、この話は進展してゆく。さて、そ

16) 『古今集抄・京都大学蔵』(臨川書店・1980) 12 ページ。

17) 古典文庫『和歌威徳物語並和歌奇徳・七小町物語』(元禄二年版・橘りつ・浜千代清編) 64~66 ページ。

18) 古典文庫『未刊謡曲集(1)』(田中允編) 119~122 ページ。なお、『未刊謡曲集(9)』55~60 ページの『景山』は、その異本であり、ほぼ同文である。

19) 古典文庫『未刊謡曲集(14)』105~110 ページ。用明天皇の第三皇子は「麿子」。ちなみに、第二皇子が聖徳太子であり、彼には大江山にこもる悪王子を退治した話もある(近松門左衛門作『用明天皇職人鑑』など)。大江山の酒吞童子と、何らかの関係があろう。

20) この三鬼にどういう漢字を当てるべきか、よくわからない。

21) 小式部の「大江山いくの道のとほければまだふみもみずあまのはしだて」(金葉集・巻九・雑上・550) など。

22) 古典文庫『未刊謡曲集(1)』247~251 ページ。

23) 「海人型」の話型については、拙稿「日本文学史の中の源氏物語——第一部・明石物語を中心として——」(『電気通信大学学報』36 巻 1 号・1985・9) を参照されたい。

24) 古典文庫『未刊謡曲集(18)』69~73 ページ。



の中に、

有難や草木も木も。我大君の国なれば。先々出でて君よりの。勅使を拝し申さん。

と、「草木も…」が引用される。

千方説話は、『諏訪』で見たように、海人型の話型と通底している。のみならず、『竹取物語』の末尾において見られた、「天皇——壺——山」というパターンとも密接に結びついているのである<sup>25)</sup>。不老不死の薬の壺が如意宝であったように<sup>26)</sup>、千方説話も何らかの意味で如意宝の物語であることが推測されるのだ。

(9) 『柳瀬』<sup>27)</sup>。主君織田信長を逆臣明智光秀に討たれた羽柴秀吉は、明智を滅して主君の仇を報ずる。その中で、

いづく王土にあらざれば。天も。照覧ましまし。安平に追罰し、亡君に報じ申さん。

と、微かながら「土も木も…」をかすめている。「天皇」という要素が武將の信長に取ってかわられ(『影山』と同じ)、かつその主君が死去している点が、「原型からの離脱」だと認められる。

(10) 『後京極』<sup>28)</sup>。「名歌は自然の物にして。鬼神も感をなす」ことの例証として、

藤原の千方には、四人の鬼をしたがへて。やすくはからん天が下。おかさんたくみ有けるに。土も木も、我大君の詠歌を、こゝろにふくしたりけるが、いづくともなく飛去て。をのづから治りし……

と語る。「紀朝雄」の名前さえ出さぬ簡略な表現である。古今序関係であるから、歌学書系統に含めるべきだったかもしれない。

(11) 『阿具留王』<sup>29)</sup>。異国の大将阿具留王が日本を従えんとして攻め寄せるのを、鹿島明神が百合若大臣に化現して防ぎ止めた、という話。その中に、

異国の大将。阿具留王。軍兵に下知をなし。粟散の小国に。争いかで鬼神の有べきか。たゞ切とれ。

という箇所がある。退治されるべき悪者が、八大童子を罵っている表現なのだが、善と悪を逆転させたうえで千方伝説をかすめているものと言ってよからう。

(12) 『十戸』<sup>30)</sup>。陸奥の住人・十戸源太清平が、まのの原の化生の物を討ち取る話である。

むかしちかたといひしもの。わうみをそむきしゆへにより。たちまち身をほろぼしなり。ましてやおさまるこの御代に。いづくか化生のすみかならん。

源太清平が「天皇」の勅命を受けたと明示されていないので、喩えられる説話(千方)と現実(源太清平)のオーバーラップが完全ではない。

(13) 『弓削源太』<sup>31)</sup>。伊予国の住人・弓削の源太治親が、比志山に住む化生(後三年の役で滅んだ清原武衡の亡魂)を退治する。

土も木も。わが大君の国なるに。いづくかおにのすむべきと。詠ぜし事もさだめなく。かゝるふしぎをなす事よ。

「土も木も…」の歌の実効性を疑うような表現が存在する。この話でも、退治を命ずる人物(天皇)の要素に欠ける。勅命に背く者の滅亡という本来のパターンが、近世になると単なる武士の手柄話に墮してゆくのである。

謡曲から目を転じて、室町時代の物語を概観してみよう。

(14) 『かなわ』。嫉妬に狂った女が生きながら鬼となり、夫とその愛人を取り殺そうとするが、逆に、頼光の四天王に討ち取られてしまう。『酒呑童子』が男と女の闘いであるならば、『鉄輪』は男と女の闘いであると言える。『酒呑童子』の女性版なのだ。さて、その物語の中に、

さりながら、いにしへも、ぶぢはらのちかたと、いひしげきしんに、つかへしおにの有しが、たむらしひと、是をほろぼしたり。<sup>32)</sup>

25) このパターンについては、拙稿「日本文学史の中の竹取物語——『竹取物語の発生基盤』続考——」(『電気通信大学学報』36巻1号・1985・9)を参照されたい。

26) 如意宝を簡単に定義しておく、思いのままに欲するものを出現させてくれる宝物のことである。

27) 古典文庫『未刊謡曲集(15)』35～38ページ。ちなみに、『徒然草』207段の、「王土にをらん虫、皇居を建てられんに、何のたゝりをかなすべき。鬼神はよこしまなし。とがむべからず。たゞみな掘り捨つべし」という言葉も、王土思想ひいては千方伝説などと関連させて考えるべき性格のものだろう。

28) 古典文庫『未刊謡曲集(19)』195～198ページ。後京極摂政・藤原良経を主人公とする話である。

29) 古典文庫『未刊謡曲集(21)』39～42ページ。

30) 古典文庫『未刊謡曲集(29)』76～79ページ。

31) 古典文庫『未刊謡曲集(31)』101～103ページ。

32) 『室町時代物語大成(3)』459ページ。

という箇所がある。鬼を召し使う藤原千方は人間だから、『鉄輪』の鬼女は、千方ではなく、彼に仕える鬼に対応するとされているのである。さらに、千方を退治したのが、紀朝雄でなく「田村利仁」とされているのにも注目せねばなるまい。千方伝説は、室町物語では必ずしも画一的な次元で定着しているのではないのだ。

(15) 『火おけのさうし』。古今注の「おにがみの心を、やはらぐる」という歌徳をめぐって千方説話が引用されるが、他の歌学書の系統と内容が大きく隔っている。舞台は、「伊勢と尾張の境、鈴鹿山」。千方を退けたのは、「田村の將軍」。なお、田村利仁が詠んだ歌は、「つちも木も、我が大きみの、国なれば、いづくかおにの、すみか成らん」である<sup>33)</sup>。

やはり、「田村」とあって、紀朝雄の名前は出てこない。発想の源泉は古今注でありながら、素材の源泉は歌学書ではないわけで、興味深い例ではある。

(16) 『田村の草子』。さて、(14)(15)の源泉となった田村利仁の話が、『田村の草子』である。この物語の分析はあまりにも重要であるが、長大なスペースを必要とするので、本稿では行わないことにする。しかし、彰考館本古活字版の巻末に、

草も木も、わがおほきみの、くになれば、いづくかおにの、すみかおほ(マ)のなるべき

という和歌が存在する事実<sup>34)</sup>からだけでも、『田村の草子』と千方伝説の結びつきが察知されることは言っておきたい。

(17) 『倭藤太物語』。将門の乱の平定を描いたもの。平国香の長男・貞盛は倭藤太側(官軍)の副將軍となり、将門に戦いを挑む。

けうぞくのらんぎやくを、しづめんために、一天の君の、せんじをかうぶり、ただ今こゝに、むかふたり。

つちも木も、わが大君の、くになれば、いづくかけうとのすみかならん、すみやかに弓をふせ、

かぶとをぬいで、君の御かたに、参るべしと、よばりけり<sup>35)</sup>。

《天皇——倭藤太・平貞盛——平将門》という構図なのである。注目されるのは、『尊卑分脈』に、倭藤太(本名・藤原秀郷)の子が「千常」、孫の名が「千方」となっており、「千方」の項には「実者千常舎弟」と注記されている、という事実である<sup>36)</sup>。

倭藤太は鎮圧者、平将門は鎮圧された者である。ところが、藤太の子孫の藤原千方は平定される側に回ってしまう。朝廷の権威によって乱を鎮める者と鎮められる者の立場が逆転してしまったのである。平将門については後に言及するであろうが、この例は、退治する者とされる者の等質性(可逆性)を示していると解しておいて誤りはあるまい<sup>37)</sup>。

(18) 『雀さうし』。古今集の序に示されている歌徳の説明として千方説話が出るのだが、固有名詞が他と違っている。伊賀・伊勢を押領し、一き・ふうき・すいき・こんきの四人の鬼を使ったのが「四はうしやうぐん」。帝の勅命をうけたのが「せんはう」。「四はうしやうぐん」は、

くさも木も、我おほきみの、くになれば、いづくかおにの、すみかともめん(マ)

の歌によって、「のしろぎは」にて滅亡した<sup>38)</sup>。内容は明白に千方伝説なのだが、人物名・地名が異っている。

以上の(1)から(18)までは、千方伝説への直接の言及、ないし、千方説話の表現の享受が指摘できるものであった。しかし、後者においては、表現のみならず構造の一致も見られたのである。千方説話が多数の作品に引用されていたという事実は、取りも直さず、千方説話と同根の(即ち、同一の話型に属する)史実・伝承・作品が数多く存在することを証しだてている。千方説話の意味を考える前に、もう少しそれと同一の発生基盤を有する用例を挙げてみたい。千方への直接の言及は見られないが、意味す

33)『室町時代物語大成(11)』18～19ページ。

34)『室町時代物語大成(9)』109ページ。

35) 同前書・163ページ。

36)『尊卑分脈(2)』386～388ページ。なお、注4に述べたように、千方の父を「千峰」とする伝承もあり、千方が藤原秀郷の直系の子孫であるとまでは断言できない。伊勢・伊賀の藤原氏は、秀郷とは別系統である可能性もわずかながらあることになる。なお、注2書・476ページの補注18参照。

37) 日本古典文学大系『神皇正統記』(岩佐正校注)182ページには、「漢高祖ハスズロニ功臣ヲ大ニ封ジ、公相ノ位ヲモ授シカバ、ハダシテ奢ヌ、奢レバホロボス。ヨリテ後ニハ功臣ノコリナクナリニケリ」とある。朝敵を退治した功臣が奢って滅亡する、というパターンである。秀郷の孫の千方が退治されるのも、このようなパターンと関連するのかもしれない。

38)『室町時代物語大成(7)』552～553ページ。なお、「せんはう」は「千方」を音読みしたものと思われる。退治されるべき「千方=ちかた」が、いつのまにか退治する者「千方=せんはう」になってしまっている。



### 2.3 千方説話の意味

千方説話がある種の大きな話型の海の中に浮かんだ小島であることを、我々は知った。その話型の海は、更に「如意宝の物語」という大海と繋がっているように思われる。

千方説話の第一の特徴は、それが歌徳説話であるということである。和歌は神仏を感応させ、鬼神の心を和らげるという。しかし、和らげるだけではなく、完膚なきまでに相手をたたきのめすことすらある。和歌は、強敵を打倒する武器となりうるのである。

如意宝の最大の機能が、病を去り永遠の生命をもたらすこと、及び、無尽蔵の富や権力などを招き寄せることにあることは、言うまでもない。その他にも無数の機能を有するのだが、武器として用いられることもある。鬼を切る「名剣」など、剣・太刀として如意宝が具体化された話は多い<sup>51)</sup>。又、如意宝の典型である打出の小槌が、善人の家に攻め入った悪者どもの脳天を打ち割る武器として用いられている話もある<sup>52)</sup>。

即ち、千方説話の最重要素材である和歌は、如意宝であったのである<sup>53)</sup>。その如意宝の効能によって、尋常の手段によっては倒しがたい敵を退散させるところに、この話の眼目の一つがあるのだ。ちなみに、このような「和歌＝如意宝」という話型と兄弟関係にあるのが、「文字＝如意宝」「書物＝如意宝」という話型だが<sup>54)</sup>、「和歌」が相手に口で誦みかけるのに対して、「文字」「書物」は文字として定着されるこ

とに意義がある、という次元の相違がある<sup>55)</sup>。

大江山系の『酒吞童子』にも、伊吹山系の『酒吞童子』にも、千方説話の痕跡が表現の中に残存していることは、既に述べた。その伊吹山系の『酒吞童子』には、千方説話の本質である「和歌＝如意宝」の思想が、他の説話に転移した形で見られるものがある。比叡山に移り住んだ酒吞童子は、ある場合は「土も木も…」、ある場合は最澄の「阿耨多羅三藐三菩提の仏たちわが立つ所に冥加あらせ給へ」という和歌の徳の前に比叡山を追われ、大江山へ移り住んだとされている<sup>56)</sup>。

大江山系も伊吹山系も、如意宝であるところの和歌の力によって鬼が攻め滅ぼされる話を共通の祖型として持っているのである。「土も木も…」や「阿耨多羅…」は、武器なのであった。二つの『酒吞童子』は、この点に関する限り、全く同一性格のものである。この「和歌」という一見優美な武器の形態を、「名剣」「神酒」という具体的なものに転換させると、本格的な大江山系の『酒吞童子』の骨格が形成されてくる。そして、歌の力が限りなく後退し、表現の中に数箇所の言及が残存するのみとなる。大江山系は、伊吹山系の素朴な歌徳説話を、武士の時代にふさわしい「剣と酒の物語」へと発展させた。それは、一面では、原型から離脱してゆく営みでもあったのである。

千方説話の第二の特徴は、正統的な権威と新興の権威との対立が見られる、ということである。この場合、前者は朝廷(天皇)であり、後者は叛逆者(朝敵)という形態を取る。ほぼ拮抗する威力を持つ二

50) 二三例をあげておく。「忝くも、王地に生ずる諸木として、などか宣旨に随はざらん。」(古典文庫『未刊謡曲集(2)』153ページ。『巴園橋])、「皇の賢き代として土も木も、動かぬ庭の榊こそ、二葉よりかうばしく、老木になれど常盤にて、君を祝ひの気色こそ、治まる御代の例かな」(『未刊謡曲集(13)』62ページ。『納涼])などと、謡曲に頻出する。

51) 「鬼切」などは、源氏の重代の家宝である。寄せ来る敵をすべて撃退する名剣の例としては、『阿弥陀胸割』の冒頭に出る「悪魔を払う剣二振」などがある。ちなみに、『宇都宮大明神代々奇瑞之事』が、平将門退治のために藤原秀郷が「神剣」を賜わったとする話を載せているのは(『群書類従(2)』307ページ)、将門との関連で注意しておいてよい話であろう。

52) 『梅津長者』(『室町時代物語大成(2)』566ページ)など。大黒天はもともと争闘の神であった。

53) これによって、和歌のそもそもの意味も推測できよう。天皇にかわって歌人が歌を詠み、それによって国家秩序の保全がもたらされるのである。歌人は、天皇の代理として、如意宝としての和歌を産み出す使命を有している。和歌は、単なる文士のなぐさみではなかったのだ。なお、注3書117ページには、「土も木も」の和歌が御製であった、とする伝承を載せる。天皇を中心とする国家秩序を天皇自らが和歌によって回復するという思想が語られていることになる。

54) 『御曹子島渡』で義経が求めた「大日の法」を記した巻物などが、「書物＝如意宝」の具体例である。

55) 尊いお経というものがあるが、尊者の声が価値があるのか、それとも尊い「文字」を読むからありがたいのか、一概に決しがたいものがある。似た例では、楽器の価値はその奏でる「音」にあるのか、それとも本体そのものの由緒正しい来歴によるのか、という問題もある。ヨムこととカクことの前後関係は、鶏と卵のようなもので、結着はつかないだろう。

56) 『山門名所旧跡記』(『天台宗全書(25)』220ページ)には、最澄が毒蛇を比叡山から比良山に追いはらった、という伝承が語られている。酒吞童子の追放と同一基盤から発生した伝承なのであろう。



つのヒエラルキーが対決し、常に朝廷(既存の権威)が勝利をおさめる。しかし、朝敵はあとからあとから湧出する。朝廷は、それを否定する勢力を不断に対置させることによってのみ、自らの存在の正統性を主張しうるのである。

では、このような第二の立場から千方説話を捉えるとき、どこに如意宝が素材として発見できるのだろうか。それは、それぞれの権威・体制が所有している部下なのである。

帝=如意宝所有者

勅使(討伐に向かう者)=如意宝

叛逆者=如意宝所有者

鬼神=如意宝

それゆえ、二つの権威の対立は、勅使と鬼神(如意宝同士)の対立へと転位することになる。紀朝雄(朝廷側の如意宝)の歌によって、藤原千方の使っていた四人の鬼(叛逆者側の如意宝)が去る。それによって、千方の敗北が決定するのである。言うならば、帝と叛逆者は、如意宝の効能競べ(宝競べ)をおこなっているのだ。

さて、「四」という数字は、理想性ないし完全性の象徴と解される。四方四季は、例えば、理想的宮殿の兼ね備えるべき必須の条件なのである。如意宝の理想性を高めるために、それを四つまで所有することもあるわけで、それを仮に「四天王型」と命名しておこう。東西南北の四つの方角を守護する持国天・増長天・広目天・多聞天は、姿を変えて様々の伝説の中に潜んでいる。「誰その四天王」という言い方は、その本来の形が仏教の四天王であることをほのめかせるものなのである。

千方が四人の鬼を使っていた理由も、それがこの四天王型の話型に属するのだと認めることではじめて納得がいく。四つの如意宝を所有する千方は、悪(異端)の側の最高権力者なのである。対する朝廷側(善・正統)が紀朝雄一人であるために、一と四のバランスが取れていないのは、均整美・構成美という点で若干惜しまれる結果となっている。

思うに、「四」という数字は、後から発生したもので、本来の形は、

如意宝所有者(主人)——如意宝(従者)

というペアーが、二組あったのである。ここで従者論を展開する余裕はないが、釈迦と車匿童子<sup>57)</sup>、聖徳太子と調子丸<sup>58)</sup>などのペアーは名高い。『源氏物語』の光源氏と惟光なども含めてよい<sup>59)</sup>。主人とその分身(援助者)の連合軍が、もう一つの主人と分身の連合軍と威を競うことになる。その際、すぐれた従者が四人いると完璧なことから、四天王型の話型が導入されてきはじめる<sup>60)</sup>。千方説話では、叛逆者のみが四天王を所有することになったが、これは過渡期の現象だと推測できるのである。四天王型の導入が完了すれば、帝の四天王と叛逆者の四天王の争い、というバランスの取れた物語となる。実は、この形に極めて近いのが、渋川版『酒吞童子』なのである。宣旨を蒙った源頼光は、有名な「頼光の四天王」を所有している。一方、退治さるべき酒吞童子も鬼の四天王を所有している。

源頼光(如意宝所有者)

四天王(如意宝)

酒吞童子(如意宝所有者)

四天王(如意宝)

これだけ見ると均衡が取れているが、実はそうではない。

帝———頼光——四天王

酒吞童子———四天王

頼光に対応するのが、酒吞童子ではないからだ。あくまで、酒吞童子は天皇(朝廷)の対立者だからである。かつ、渋川版『酒吞童子』では、頼光が引き連れているのは、「定光・末武・綱・公時・保昌」の五人であって<sup>61)</sup>、必ずしも「四天王」とは総称できないのである。しかしながら、『酒吞童子』が、四天王型の物語としての完成をめざすものであることはまちがいがなく、それもその最終局面近くに位置していることは認めてもよいであろう。

以上をまとめてみると、如意宝をめぐる二つの話

57) 釈迦の出離に際して馬の口をひいた御者が、車匿である。『今昔物語集』巻一・第四・「悉達多太子出城入山語」などに見える。

58) 聖徳太子が黒駒に乗って空を飛んだとき従っていた舍人が調子丸である。『今昔物語集』巻十一・第一・「聖徳太子於此朝始弘法語」などに見える。

59) 所謂『雲隠六帖』の一つ『雲隠』では、出家する光源氏は、惟光の子の惟秀を従えていた、という。光源氏と惟光も、やはり釈迦と車匿の関係とほぼ等しいものだったのである。

60) 四天王を所有する人間まで含めると、総勢五人となる。陰陽五行説とも、何かしらの関連があるかもしれない。

61) 注6書・363ページ。



型が、千方説話には内在していた。《和歌＝如意宝》と《部下＝如意宝》というパターンである。伊吹山系の比較的単純な『酒呑童子』が大江山系の複雑な『酒呑童子』へと発展してゆく過程をも、この二つの話型を作業仮説として設定することで解明できることを、簡単ながら述べてきたわけである。千方説話は短いものではあるが、確実に、御伽草子の代表作『酒呑童子』の母体なのである。

### 3. 四天王型への道

#### 3.1 数字に関して

四天王型は、当初から『酒呑童子』に内在していたのではなく、その生長発展段階において附加されてきたものであった。強力な部下を所有する者同士の対決という、緊迫感を持つテーマを実現するために、《四》という数字が選ばれたのであった。『酒呑童子』は、《4:4》の物語を志向しているのである。このような話型で、他にどのような数字が用いられているのか、最初に概観しておきたい。

まず、スサノオのヤマタノオロチ退治から考えてみよう。八つの頭を持つオロチを、一人の英雄が撃退する。言うならば、《1:8》の対立である。しかし、ヤマタノオロチを退治したスサノオの和歌。

八雲立つ出雲八重垣妻籠みに八重垣作るその八重垣を<sup>62)</sup>

に示されているように、彼はオロチを打倒することで自らが《八》になった。二人の対立は、潜在的に《8:8》で示される性格のものだったのである。《八》は《四》の倍数であり、《四》の象徴する人格の完成と同じ意義を有するはずである。ヤマタノオロチ(八岐大蛇)は悪の最高権威、八重垣に定住したスサノオは善の最高権威ということになるだろうか。

室町時代物語『小式部』に、酒呑童子の話を書けるが、帝は、頼光・保昌の二人の将軍に命じて童子を討たせる。酒呑童子のありさまは、

かしらは八つ、あし九つ、御まなこ十六有、を

にとりて、ひのほむらのごとく成、いきをふきかけ、山ぶしたちをとらんとしければ、<sup>63)</sup>

と描写されている。朝廷側は《二》、酒呑童子側は《八》で表わされる。《2:8》の対立だが、酒呑童子を八頭としたのは、ヤマタノオロチのイメージの投影であろう。なお、ここにおいて、頼光と保昌の二人がほぼ同一の地位にあることは注目されてよく、それは話型的には、《鬚切・膝丸》と等しく、《二つの刀》を変型した《二人の武将》のパターンに属することになるわけである<sup>64)</sup>。《二》が《八》を破る、という点が、数の不均整を示している。この話のようなレベルでは読者に受けとめられがたかったであろうことが容易に推測され、『酒呑童子』の四天王型への発展の過程の極く初期のものと思われるのである。

《八》に関連して一つだけ付け加えておくと、《四天王》ならぬ《八勇士》という形で作品を構成したのが、『南総里見八犬伝』ということになる。八犬士の所有する玉は如意宝珠であり、それは一人一人の犬士が如意宝であることを明らかにしているのである。

次に、平将門を見てみる。時代が下るが、江戸時代の黄表紙に『時代世話二挺鼓』なる作品がある<sup>65)</sup>。都の朝廷を驚かせ、新皇と称し新しい朝廷を関東に樹立した叛逆児・平将門の事跡をパロディー化した作品であるが、そのパロディーの方法が面白い。平将門を《七》、平定する藤原秀郷を《八》の権化とする<sup>66)</sup>。数々の勝負でも《八》が《七》を上回り、遂に将門は秀郷の前に滅びたのであった。《7:8》の対立として捉えたわけで、ほぼ拮抗する二つの勢力が真っ向から衝突する『酒呑童子』(《4:4》)と、かなり近くなっていることがわかる。

少し、話が脇道に外れるが、将門の首は空を飛んだという<sup>67)</sup>。九州松浦の鏡明神も、叛逆者・藤原広嗣を祀ったものだが、『河海抄』は、広嗣の首が空を翔ったという故事を記している<sup>68)</sup>。『酒呑童子』でも、童子の首は一旦空へ舞い上がり、頼光の兜に噛み付いた、とされる。この首が宙を飛ぶパターンの原型

62) 日本古典文学大系『古事記』(倉野憲司校注) 89 ページ。なお、この歌は『古今集』の仮名序において、和歌の起源として引用されている。

63) 『室町時代物語大成(5)』24～25 ページ。

64) 注 23 の拙稿参照。

65) 小池・宇田・中山・棚橋編『江戸の戯作絵本・続巻(2)』(教養文庫)などに所収。

66) 将門に六人の影武者がいたことからの着想である。六人の影武者がいたとは、将門が六人の鬼神を所有していたことと同じ意味を持っているはずである。

67) 注 3 書・117 ページによれば、千方の首も飛んだという。とにかく、千方と将門には類似点が多い。

68) 玉上琢弥編『紫明抄・河海抄』(角川書店・1968) 385 ページ。玉鬘巻の鏡明神に対する注である。

は、退治された悪人の首を宙に蹴り上げるという話に求めることができると考える。両者の間には、飛んだのか、飛ばされたのか、という違いがあるだけである。さて、首を蹴り上げられた人物の嚙矢が、黄帝に逆った蚩尤である。蚩尤の首を蹴ったのが、蹴鞠の起源だとされている。室町時代物語『舟のみとく』には、

さるほどに、しゅうが左右の臣下に、かうりうし、あくくわいし、と云もの有<sup>69</sup>。

とあり、蚩尤が二人の臣下を召し抱えていたことが知られる。これは藤原千方の四人の鬼に対応するものであり、蚩尤の話も、千方ならびに酒呑童子の話型に属することになるのである。『平家物語』巻五、「奈良炎上」に、

又南部には大なる球<sup>ぎつちやう</sup>丁の玉をつくって、これは平相国のかうべとなづけて、「うて、ふめ」などぞ申ける。<sup>70</sup>

とあるのも同様に、平清盛の首を、蚩尤や将門の首と同列に置く表現と言えよう。この清盛は、『平家物語』の冒頭において、将門・純友・義親・信頼と並んで、朝廷に齒向かった悪人として登場してきた人物なのであった<sup>71</sup>。

三番目に、悪七兵衛景清を見てみる。景清は平家の遺臣であり、平家を滅亡させた源氏の棟梁・源頼朝の首をつけねらっている。その頼朝の腹臣として景清の企てを妨害するのが畠山重忠である。

源氏(源頼朝)——畠山重忠  
平家——景清

というように、主君と従者のペアが二組存在するのである。さて、景清の度重なる計画が失敗した理由として、近松門左衛門の『出世景清』は、

かう申かけきよは二相をさと候へ共。しげたゞは四相をさとる。よりともに出合うたんとせしこと三十四度にをよべども。しげたゞにへだてられついに本望とげ申さず。<sup>72</sup>

と説明する。重忠が「四」、景清が「二」であるゆえ、「四」が「二」を抑えたのだ。「4 : 2」の対立も、四天王型(4 : 4)と非常に近いところに位置することに

なろう。

以上を要するに、「8 : 8」「7 : 8」「4 : 2」等で、二つの勢力がぶつかりあう話がいくつか指摘できたのである。どちらか一方が必ず勝利をおさめねばならないために、完全な意味での「4 : 4」(完全性と完全性)の対立が存在することは少ない。『酒呑童子』はその中であって、ひたすら四天王型への道を歩みつづけたのである。その様子を、次節で観察してみることしよう。

### 3.2 『酒呑童子』の発展

四天王型という観点から見ると、最も古態を残していると思われるのは、前にも引いたが、『小式部』に挿入されている酒呑童子退治のエピソードである。ここにおいては、頼光と保昌がほぼ同じ比重なのである。

かのをにをうつべきよしを、らいくわう、ほうしやう、二人のしやうぐんに、ちよくし有<sup>73</sup>と始まっているし、酒呑童子退治の褒美も、頼光は莫大は所領、保昌は和泉式部、というように、ほぼ平等なのである。

さて、頼光・保昌の二將軍は、二人のみで発向したのではなかった。

らいくわうは、つなといふ、ぶように、すぐれたる、ものばかり、めしぐせられたり、ほうしやうは、ひどりむしやばかり、めしぐしたり<sup>74</sup>とあり、総勢四人で出発したのである。

帝——頼光——綱  
↑  
保昌——武者(名前は未詳)  
酒呑童子(八つの頭)

帝の有する「四」(厳密には、「二」プラス「二」と、酒呑童子の「八」との対決、という図式なのだ。この時点で、まだ「四天王」という呼称はなされていない。酒呑童子には鬼の四天王は存在していないし、頼光側は合わせて四名だがその構成メンバーが頼光の四天王とは異なるのである。

次に、伊吹山系の『酒呑童子』を見てみる。舞台は伊吹山であり、童子はこの伊吹山で滅亡する。『伊吹山酒呑童子』(岩瀬文庫蔵)<sup>75</sup>によると、帝の宣旨

69)『室町時代物語大成(11)』557ページ。

70)日本古典文学大系『平家物語(上)』(高木・小沢・渥美・金田一校注)381ページ。

71)同前書・83ページ。なお、ここで列挙されている叛逆者の一人・源義親が千方型の話型に属することについては、既に注40で触れておいた。

72)『近松全集(1)』(岩波書店・1985)70~71ページ。

73)『室町時代物語大成(5)』24ページ。

74)同前書・同ページ。

を蒙ったのは頼光ただ一人。彼は、綱・公時・貞光・末武の《四天王の者共》を具して旅立つ。一方の酒呑童子は、御号・桐王・阿防・羅刹という《四天王》を所有している。なお、その他に、金熊童子・石熊童子という大力の童子を身边において何くれとなく召し使っている。

帝———頼光——四天王

酒呑童子——×——四天王

という本来の形での対応はないが、

頼光———四天王

酒呑童子——四天王

という形での対応なら確かに存在する。しかし、酒呑童子は、鬼の四天王の他にも金熊童子と石熊童子という二人の鬼神がいたのであって、彼らの位置が落ち着かないのである。つまり、岩瀬文庫本は、四天王という点でほとんど完成に近いが、完全なる均整美は存在しないのである。ともあれ、この作品においては、《保昌》を黙殺し登場させないことによって、四天王型の話型を顕現しようとしているのである。実際、頼光側にも酒呑童子側にも、《四天王》という語句が使用されている。なお、この話と前述の『小式部』挿入の話とで、どちらがより古態を残しているのかは、微妙な問題であって一概には言えないであろう。

その点、大江山系の『大江山しゅてん童子』（慶応大学図書館蔵）<sup>75)</sup>は、均整の取れた構成をしている。宣旨を蒙るのは頼光と保昌の二人の将軍であり、頼光は、つな・きんとき・さだみつ・すゑたけの四天王の輩を従えて発向する。対する童子側は、

まづ、二てんといふは、いしくま、かなくまなり、四てんとは、あをくま、あかくま、しろくま、くろくま、なり、そのほか、えんら、あしゆら、あはう、らせつ、のおにども、こゝのいはや、かしこのほらより、うちむれうちむれ、われさきにと出で<sup>77)</sup>

と語られる。《二天王》の下に《四天王》がいるわけである。全体として、

帝———二将軍——四天王

酒呑童子——二天王——四天王

という同一のヒエラルキーが並立することとなっ

た。朝廷と朝廷に背く者、という図式に、完全に則ることができたのである。注意せねばならぬのは、《天皇》を含めた場合の均整をここで問題としている、ということである。王土思想・王権思想の投影として『酒呑童子』を理解しようとするときには、当然の前提であろう。

しかし、この話を源頼光という一人の武將を主人公にして読もうとする読者にとってみれば、どうなるだろうか。《保昌》がどうにも目障りな存在なのである。仮に保昌を無視したとしても、頼光の四天王に対応するのが、鬼の二天王と四天王の合わせて六人であるのも落着かない。ここにおいて、『酒呑童子』は、

頼光———四天王

酒呑童子——四天王

という、武家の棟梁の物語としての完成をめざして、新たな展開を見せることになる。それは、結果として、話型本来の意味（二つの権威の角逐）を薄れさせ、帝や保昌を含めた全体の均整美を破壊するものだったのである。

『酒呑童子』という作品は、成長・発展をつづけ、やがてその頂点に達し、なおかつその後も下降線を描きながら増殖・拡大していったのである。複雑の極みに達したものが単純化への道を辿る、ということでもある。

### 3.3 渋川版『酒呑童子』の位相

江戸時代に入ってから絵入り板本として刊行された渋川清右衛門板行の『酒呑童子』は、《四天王》という観点から眺めた場合、どのように位置づけられるのだろうか。

帝に召されるのは、頼光ただ一人である。関白の、さりながら今こゝに頼光を召されつゝ、鬼神討てよとの給はゞ、定光、末武、綱、公時、保昌をはじめとし、此人々には鬼神もおぢをのゝきて恐れをなすとうけ給はる。此者共に仰付られ候へかし。<sup>78)</sup>

という奏上に端的に示されているように、《保昌》は、他の頼光の四天王の後に位置し、まるで頼光の臣下であるかの如き扱いを受けている。又、酒呑童子退治に際しても、これといった活躍はしていない。褒

75) 『室町時代物語大成(2)』379～400 ページ。

76) 『室町時代物語大成(3)』141～184 ページ。

77) 同前書・167 ページ。

78) 注6書・363 ページ。

賞にあずかったのも頼光であって、保昌には触れられない。頼光を頂点とするヒエラルキー（ある意味で、朝廷とは別次元の独立した秩序の観すら呈している）を「四天王」として整理するために、「保昌」を頼光と同格の存在から臣下へと転落させたのである。しかし、「保昌」の名を完全に消去しきっていない点に、かつて保昌が果たしていた役割の大きさが逆に想像されるのである。話型として単純化をめざしながら、かえって複雑さ、曖昧さを産み出してしまった、と言ってもよいであろう。

酒呑童子の側は、どうか。

籠の口には眷属どもに、ほしくま童子くま童子、  
とらくま童子かね童子、四天王と名づけて番を  
させて置きける。<sup>79)</sup>

こちら、すっきりと「四天王」に整理されている。しかし、この場合も、その名称に関して瑕瑾が指摘できる。「くま童子」とは何者なのか。日本古典文学大系頭注は、「くまどうじは石熊童子か」<sup>80)</sup>とするが、たとえそうであっても、肝腎の固有名詞を確定しえていない点に、微かではあるが落ち着きの悪さを感じるのである。

つまり、頼光側も酒呑童子側も、四天王に簡略化しようとしながら、そうなりえていないのである。「二天」を限りなく消去しようとしつつ、そうしきっていない点に、渋川版『酒呑童子』の特殊性が看取できる。

結果的に、『伊吹山酒頭童子』（岩瀬文庫蔵）とはほぼ等しい位相となった。そこにおいては、保昌は全く姿を見せず、そのかわり鬼の四天王と二天王が整理されていないのであった。発展・成長をつづけた『酒呑童子』は、四天王の話型に関する限り、原初的な形態へと逆戻りしてしまったのである。

最後に、伊吹山系の『酒呑童子』の成立に関する一つの見通しを述べておこう。伊吹山を追われて大江山に移り住む話がより古く、伊吹山で童子が滅ぶのは大江山系の単なる移植ではなからうか、ということである。その辺の事情を推測してみると、次のようにでもなるかと思う。

A 伊吹山を「土も木も…」の歌で追われる。（和

歌＝如意宝）

B 比叡山を「阿耨多羅…」の歌で追われる。（和歌＝如意宝）

C 大江山で栄華を極めるが、「土も木も…」で象徴される王土思想・王権思想の前に滅ぶ。（和歌＝如意宝）

D 大江山で栄華を極めるが、天皇の勅使の前に滅ぶ。（勅使・武将＝如意宝）

D' 大江山で栄華を極めるが、名剣や神酒の前に滅ぶ。（剣・酒＝如意宝）<sup>81)</sup>

D 0 四天王型の対応関係が不十分のもの。

D 1 { 天皇——二将——四天王  
童子——二天——四天王

D 2 { 頼光——四天王  
童子——四天王

E 伊吹山で栄華を極めるが、天皇の勅使・剣・酒の前に滅ぶ。

A と B と C は、和歌ないし山の名前が違っているだけで、完全に同一の位相にある。ただし、話の内容から考えると、A より B が新しく、B より C が新しいように思われる。C から DD' への進化が、この話の大きな節目であって、一挙に物語は複雑化・長篇化する糸口を掴んだ。やがて、長篇化の過程は D 1 に到ってほぼ完成したが、やがて新しい構想 D 2 が発生し、今度は単純化することを目的とする改作が始まった。しかし、D 2 は完成するに到らなかった。その DD' の発展過程の中で、舞台を伊吹山とするだけで、あとは大江山系とほとんど変わらない E が派生してきた。D の成長 (D 0 → D 1 → D 2) と E の発生はほぼ平行しながらおこったのであって、あるいは、D 0・D 1・D 2 のそれぞれの段階での投影が E になされたのであり、伊吹山系の方が、四天王型に関する限り大江山系よりも古態を残すということも、十分ありえたのである<sup>82)</sup>。

渋川版『酒呑童子』は、D 1 から D 2 への移行を示している本文を有するのである。

79) 同前書・369 ページ。

80) 同前書・同ページの頭注 10。

81) 酒と剣については、とりあえず現段階での考察からははずしておく。要するに、「和歌」を消去しよう、あるいは他の形に転換しようという動きがおこるのである。

82) 先ほどの図式を用いて説明すると、E にも E 0・E 1・E 2 があり、その場合には E 0の方が D 1・D 2 よりも古い形態を残すことがある、ということである。

## 4. 目と目が出合うとき

### 4.1 目と目の睨み合い

四天王型について考察してきたわけだが、では、この話型が何を意味し、何を主題として表現しようとしているのかということをめぐって、考えを進めることにしよう。

鬼であれ、竜であれ、はたまた人間であれ、他と異なる突出したものには必ず鋭い眼光がある。目の光は、その目の所有者の、凡人ならざる内面性を象徴するのである。

スサノオの退治したヤマタノオロチの目は、アカカガチ(赤酸漿)のようだったとされる<sup>83)</sup>。江戸随筆『うき草のあと』は、安芸国八面山にいた八頭の蛇の話の戴せるが、「其蛇のいかれるときは眼ひかりて、みるもの気をうしなふといへり」<sup>84)</sup>と語る。

蛇の目の威力を述べる話は、蛇(竜)と密接に関連する雷神の目の輝きと並んで、古くから説話に数多く取りあげられている。小子部栖軽に雷神を生け捕らせたものの、その恐ろしさに目を塞いで逃げ出した雄略天皇の話などが、その典型である<sup>85)</sup>。これは、人間としての最高の権力を持つ天皇の眼力でさえ、雷神の目を対等に睨みえなかった話であり、「目と目の睨み合い」という話型の一形態と解することもできよう。「稲光、<sup>まなこ</sup>眼を取る」という諺もある<sup>86)</sup>。

これらの光る目は、「目玉=如意宝」、特に「目玉=如意宝珠」という発想の形式に支えられたものである。竜の目玉が如意宝珠になった例には、『当願幕当之縁起』などがある<sup>87)</sup>。如意宝(如意宝珠)には夜光という重要な特性があり、目の輝きはこの「夜光」に根源を求めることができるだろう。

蛇の肝が眼病に効くというも<sup>88)</sup>、竜の目の威力と何かしら繋がりがあろう。

さて、前述した雄略天皇と雷神の話には、目と目

の睨み合い(光り合い)というモチーフが発見できた。二人の英傑(善であれ悪であれ、突出した存在)が覇を競う際に、目の威力を問題にすることがあるわけだ。

室町時代物語『田村の草子』に、

あくる王、我宿ちかくなれば、門まもりの女はなきか、我るすに、何ものなれば来るぞ、たゞ手なかけそ、にらみころせとて、千八百の、まなこのひかり、くわゑんの、とぶごとく也され共、俊仁の、かうべのうへには、日月、あま下り給ひて、としひとの、まなことなりて、にらみ給へば、おにども、にらみまけて、ちの涙をながしける<sup>89)</sup>

とある。日と月の助力で、鬼王の眼光に睨み勝つ、というものである。同種の表現は、『きまん国物語』にも、

おにのまなこのひかり、いなづまのごとし、されども、日本の御神たち、さへもんのまなこに、じやうはりのかゝみを、あたへたまへば、ぼんぶのまなこに、ひかりのますこと、日月の、くものなかより、あざやかに、てらし給ふがごとし、されども、三時ばかり、少もうごかず、にらみいたり<sup>90)</sup>

とある。こちらは、「睨み合い」が長時間続くほど力が拮抗していたことが強調されている。

目が如意宝であるならば、目と目の睨み合いは、如意宝の威力競べ(宝競べ)ということになる。四天王(=如意宝)を所有する者同士の対決という四天王型の話型を若干スライドさせると、光る目と光る目の睨み合いという話が発生するのである。

『平家物語』巻五、「物怪之沙汰」に、

かのひとつの大がしらに、いきたる人のまなこの様に大のまなこどもが千万いできて、入道相国をちやうどにらまへて、まだゝきもせず、入

83) 注62書・87ページ。

84) 『日本随筆大成・第二期(8)』(吉川弘文館・1974)61ページ。

85) 日本古典文学大系『日本書紀(上)』(坂本・家永・井上・大野・校注)472ページには、「天皇、畏いたまひて、目を蔽ひて見たまはずして、殿中に却入れたまひぬ」とある。『莊子』にも、葉公が竜を見て気絶したエピソードがある。近藤喜博『日本の鬼』(桜楓社・1966)253ページにも、雷神の目と人間の巨眼の睨み合いというモチーフが語られている。

86) 注6書・272ページ。

87) 中世文芸叢書『瀬戸内寺社縁起集』76ページ。

88) 古典文庫『新語園(下)』(寛文十二年版複製)237~238ページ。

89) 『室町時代物語大成(9)』91ページ。なお、「あくる王」とは、陸奥の高山の鬼の名だが、注11の「阿具留王」と関連あるかもしれない。又、『鈴鹿の草子』(『室町時代物語大成(7)』472~473ページ、510~511ページ)にも、似た表現がある。

90) 『室町時代物語大成(4)』108~109ページ。



道すこしもさはがず、はたとにらまへてしばらくたゝれたり。かの大がしらあまりにつよくにらまれたてまつり、霜露などの日にあたってきゆるやうに、跡かたもなくなりけり<sup>91)</sup>。

とあるのも、この「目と目の睨み合い」の話型に属する。歌舞伎の『楼門五三桐』も、石川五右衛門と豊臣秀吉の睨み合いを主題とするものであるし、悪七兵衛景清が目玉を剝り貫いたのも、源頼朝との睨み合いをあえて回避するためなのであった<sup>92)</sup>。

思うに、二人の傑物の睨み合いは、二つのヒエラルキーの対立という現実をドラマ化したものなのである。都の朝廷と関東の新皇（平将門）の対立、源氏の擁する後白河院（都）と平家の守護する安徳天皇（福原）の両立、『太平記』にあらわれる南朝と北朝の「二人の天皇」というパターン<sup>93)</sup>。これらが互いに勢力を持ち自らの正統性を主張しあう行為が、実は、睨み合いの意味するものなのである。

目と目の睨み合いに戻ると、『酒呑童子』ではどのように表現されているのか、という問題がある。

『伊吹山酒呑童子』（岩瀬文庫蔵）。酒呑童子は、「日の出るがごとく、輝きらめきたる」<sup>94)</sup>とされるのみだが、これはむしろ目の光を意味しているのである<sup>95)</sup>。対する源頼光は、

かの頼光と申は、清和の後胤として、武家の棟梁たり、力人に勝れて、たけき事、並なし、樊会も及難し、眼の光おそろしく、神通をそなへ、自他の善悪を能々かんがへて見る事、掌を指がごとし<sup>96)</sup>。  
都に、頼光と申、くせ者有、古も今も、是ほど、武威に達せる、者なし、仁義の道、明にして、

天下の守也、力人に勝、眼に光有て、むかふと、向ほどの朝敵を、滅さずと云事なし<sup>97)</sup>

と、眼光が強調されている。酒呑童子と源頼光の対決は、その四天王の力競べのみならず、本人達の眼力競べの様相をも呈するのである。むしろ、二つの競争は、同じ意味（宝競べ）を有しているのではあるが。

『大江山酒呑童子』（逸翁美術館蔵）。鬼の城に到着した頼光主従の前を、いろいろな変化の者が通る。

頼光、ざせき居つくろいて、面もふらず、目をも、はなたず、暫くまぼりて、おはしければ、眼の底より、五色の光ぞ、出たりける<sup>98)</sup>

「五色の光」は、「夜光」と同値の表現であり、そのものが如意宝であることを示すものである<sup>99)</sup>。頼光の目は、悪を斥ける如意宝なのである。頼光は童子の首を切りおとすが、首は頼光の兜に噛みついたまま離れない。

頼光、の給様、眼をくじれと、の給へば、綱、公時、つとよりて、刀をぬきて、左右の目を、くじりたれば、鬼王の頸、死にけり<sup>100)</sup>

頼光は鬼王との睨み合いに勝ち、その証しとして相手の目を抉ったのである。

ちなみに、『土ぐも』に、

そののち、また、わたなべの源五、綱といふもの、まいりたり、きりやう、ことにゆゆしく、たけ七尺ゆたかにしてまなこに光あり<sup>101)</sup>

とあるのは、渡辺綱（頼光の四天王の代表者）が如意宝であることを意味している。四天王の一人一人は、名剣などに喩えられる如意宝なのである<sup>102)</sup>。

頼光は、目と目の睨み合いに勝ち、相手の目を抉

91) 注 70 書・342 ページ。

92) ギリシャ神話にも、蛇の目と太陽神アポロンの睨み合いというモチーフがある（逸身・片山訳『四つのギリシャ神話』岩波文庫・1985）85 ページ。

93) 古くは、聖徳太子と物部守屋の対立、天皇家を圧倒し皇位すら奪わんとした蘇我入鹿などがある。

94) 『室町時代物語大成(2)』389 ページ。

95) 赤木文庫蔵『酒典童子』（同前書・374 ページ）には、「さも物すごき鬼神の、おもてのいろは、しゅのごとくにて、日月のやうなる、まなこを見出し、あゆみ来る有さま、身のけもよだって、おそろしや」とある。童子の眼光の鋭さが語られているのである。

96) 同前書・381 ページ。

97) 同前書・391 ページ。

98) 『室町時代物語大成(3)』133 ページ。

99) 五色の玉・五色の土・五色の松など「五色」が瑞相として語られることは多い。如意宝の典型である如意宝珠の五色が、夜光の玉を意味することについては、拙稿「竹取物語の発生基盤——その話型的研究——」（『電気通信大学学報』35 巻 2 号・1985・2）を参照されたい。

100) 『室町時代物語大成(3)』135 ページ。

101) 『室町時代物語大成(9)』431 ページ。

102) 慶応大学図書館蔵『大江山しゅんてん童子』では、綱は「鬼切」、公時は「波切」、貞光は「石切」、季武は「痣丸」という名剣を所持していたことになっている（『室町時代物語大成(3)』148～149 ページ）。このうち、「痣丸」は平家重代の名剣だから疑問が残る。

った。敵の最大の長所を正面から打破し、使い物にならぬようにしたのである。これが、神話・昔話に頻出する、鬼（ないし、蛇・神）の目をつぶす（ないし、矢で射る・錐で刺す）というパターンの変型であることは間違いない。「神の目をつぶす」のは、「目と目の睨み合い」に勝利をおさめたことと等価だからである。

目をつぶす話はあまりにも多いので、ここでは具体例はあげないことにする。ただ、いくつか注意すべき点について述べておきたい。

黄帝と争った蚩尤については、その首が空を飛んだことをめぐって以前に言及したことがある。黄帝と蚩尤も、睨み合う目と目の所有者なのであった。

『詞林采葉抄』には、

黄帝ノ臣下蚩尤、涿鹿ノ野ニテ討レタリシ眼ヲ、  
毬打ノ玉ニシテ打事ヲ、玉キハルウツト云也  
103)

とあり、ここでは、首を蹴るのではなく、目を割り貫いて蹴ることになっている。これは、黄帝が強敵に睨み勝ったことを記念しておこなわれた行為なのである。『詞源略注』にも、やはり「タマキハル」の項に、

仍取蚩尤頭毬之、取眼射之云々。又云、毬打是也。104)

とある。首を蹴り、眼を射るのであって、『詞林采葉抄』の注とあわせれば、「首を蹴る」=「眼を抉る」=「眼を射る」という結論が得られるのである。

『神道集』巻四・第十七・「信濃国鎮守諏訪大明神秋山祭事」は、「田村丸」が「悪事ノ高丸」を退治するもので、『田村の草子』や『酒吞童子』と類似する内容を持っている<sup>105)</sup>。悪事の高丸を攻めあぐんだ田村丸は一計を案じ、金の鞆で鞠遊びをし、流鏑矢を射たりする。それを見て興じた高丸の娘が、父に勧めてそのようすを石の扉から覗かせたところ、田村丸は矢を射かけて高丸の左目を射通したのである。「鞠」と「目を射る」という要素の結合は、明らかに蚩尤の故事を踏まえたものである。ある意味で、翻案と言ってよいかもしれない。このように、「目を射る」

というモチーフは、『酒吞童子』と同一話型に属する諸作品に広く見出すことが可能なのである。

「目をつぶす」点に関して、もう一つだけ指摘しておきたい。『源氏物語』にも、このモチーフが内在していると思われるからである。

まず、明石巻。朱雀帝が都において王権を代表し、その王権にとって脅威とみなされた光源氏が須磨の地にいる。『平家物語』に現われる、京都の院と福原の天皇という図式に近い。光源氏の代表する秩序は大暴風雨の前に崩壊の危機に瀕しているのだが、ここで物語世界に一大転機がもたらされる。故桐壺院の霊が出現し、光源氏を庇護し、朱雀帝を詰問したのである。

三月十三日、雷鳴りひらめき雨風騒がしき夜、帝の御夢に、院の帝、御前の御階の下に立たせたまひて、御気色いとあしうて睨みきこえさせたまふを、かしこまりておはします。聞こえさせたまふことども多かり。源氏の御ことなりけんかし。(中略)睨みたまひしに目見あはせたまふと見しけにや、御目わづらひたまひて、たへ難う悩みたまふ<sup>106)</sup>。

雷神に睨まれ、目を覆うて逃げ出した雄略天皇が想起される<sup>107)</sup>。朱雀帝は、実父・故桐壺院との目の睨み合いに敗北し、眼病にかかった。言うならば、目をつぶされたのである。この睨み合いを契機に、光源氏の運が開け始める。光源氏が直接朱雀帝と睨み合うのではなく、故桐壺院がそれをおこなう点が、やや特殊ではある<sup>108)</sup>。

次に、若菜下巻。准太上天皇として栄華を極める光源氏に若い侵犯者が出現した。柏木である。柏木は光源氏の正妻・女三の宮と過ちを犯し、罪の子・薫を儲けたのである。この事実を察知した光源氏は、酒の席に柏木を呼び寄せる。

主の院、「過ぐる齡にそへては、酔泣きこそとどめがたきわざなりけれ。衛門督心をとどめてほほ笑まる。いと心恥づかしや。さりとも、いましばしならん。さかさまに行かぬ年月よ。老は、えのがれぬわざなり」とてうち見やりたま

103) 片桐洋一監修『詞林采葉抄』(大学堂書店・1977) 181 ページ。「玉キハル」という枕詞が「ウツ」にかかる理由を説明する箇所である。

104) 古典文庫『詞源略注』(大取一馬編) 124 ページ。

105) 『神道集・河野本(上)』(渡辺国雄・近藤喜博編・角川書店・1962) 337~361 ページ。

106) 日本古典文学全集『源氏物語(2)』(阿部秋生・秋山虔・今井源衛校注) 241 ページ。

107) 雷神といえば、死後に雷となって宮中をおびやかした菅原道真も想起されてくる。彼も又、都の王権と戦った雷神なのであった。

108) 注 23 の拙稿を参照されたい。

ふに、人よりけにまめだち屈じて、まことに心地もいと悩まなければ、いみじき事も目とまらぬ心地する人をしも、さし分きて空酔をしつつかくのたまふ。戯れのやうなれど、いとど胸つぶれて、盃のめぐり来るも頭いたくおぼゆれば、けしきばかりにて紛らはすを御覧じとがめて、持たせながらたびたび強ひたまへば、はしたなくてもてわづらふさま、なべての人に似ずをかし。<sup>109)</sup>

この睨み合いは、表面的には光源氏の勝利に終わった。柏木は、女三の宮に、

夕はわきてながめさせたまへ。咎めきこえさせたまはん人目をも、今は心やすく思しなりて、かひなきあはれをだにも絶えずかけさせたまへ。<sup>110)</sup>

という手紙を送るほど、光源氏の「目」を恐懼していたのである。柏木はやがて死去した。光源氏の全面的勝利と見えたこの「目と目の睨み合い」も、しかしながら、光源氏の世界の崩壊という事態をもたらすことになる。光源氏是对立者を滅ぼすことで、自らの世界をも否定したのである。この辺の事情について、詳しくは別稿を用意している<sup>111)</sup>。

四天王型の話型の意味するところを追究した結果、「目と目の睨み合い」というモチーフを発見し、それが文学史上、あるいは歴史的現実として広く存在することを確認した。『源氏物語』と『酒呑童子』は、意外な深部で通底していたのである。

#### 4.2 二項対立の世界観

宗教的儀式の本質は、その左右対称性にあるといわれる。儀式で用いられる道具の配置は左右・上下に関して対称である。又、宗教に起源を有すると思われる競技においては、拮抗する二つのグループに別れて勝利を競い合うが、これも一種の左右対称性の現われと言ってよいであろう。このような宗教的儀式に見られる左右対称を産み出す民族の心性と、『酒呑童子』などの文学作品に見られた根強い四天王型（四天王と四天王との争い）の話型に対する人気

とは、基本的に同一のものであると私には思われるのである。

宗教的色彩は弱まっても、絵合・歌合など、左右の二勢力が争う形式は残った。言うならば、二項対立図式である。

ところで、ほぼ同じ力を持つ二つの勢力が争うといっても、勝利する側は最初から決まっている場合が多い。歌合において、一番左（女房）は必ず「勝」とせねばならぬ決まりであった。『源氏物語』匂宮巻には、賭弓に関して、

例の、左あながちに勝ちぬ。<sup>112)</sup>

とあり、『細流抄』は、

此物語左右にわかれてる事、大略左が勝也。絵合・韻ふたぎ、皆左の勝也。さて、れいの、とかけるにや。<sup>113)</sup>

と注している。どうして、このような一方的勝利がおこるのであろうか。

祭式競技における左右ないし東西の対決は、陰と陽、男性原理と女性原理、和魂と荒魂の対立抗争を意味している。神の本性として相反する二つの要素をあえて拡大して抗争させ、その上で一つに和合させることで、神を活性化させるのである。それが部族社会の発展を意味することは言うまでもあるまい<sup>114)</sup>。

一つのものが二つに分化し、更に一つに合する。その合一の方法は、いつも同じでなければならない。勝者は戦う前から既に決定しているのである。

だがこの日本の例でみるような競技は、あらかじめ勝組がきまっている。すでに試合組には勝つべき側と負けるべき側とが定められているのだ。もし、負けるべき側が勝てば、世界は不況と凶作と貧困にみまわれるという否定的な価値が定められているからだ。<sup>115)</sup>

社会集団の停滞する気分を刺激し更新するためには、二つの異なる原理間の葛藤を生じさせる必要がある、かつ、このような二項対立は最終的にはその統合を目的としているのである。

109) 日本古典文学全集『源氏物語(4)』270～271 ページ。

110) 同前書・287 ページ。柏木巻。

111) 「柏木物語の成立——源氏物語第二部の基層」(『国語と国文学』1986・8)。

112) 日本古典文学全集『源氏物語(5)』27 ページ。

113) 伊井春樹編『内閣文庫本・細流抄』(1975・2・桜楓社) 337 ページ。なお、現実には左側が勝ちつづけているわけではなく、注 112 書・73 ページには「右勝たせたまひぬ」(竹河巻)とある。それゆえ、匂宮巻のこの部分は、あくまで「理念」を述べたものと考えべきなのだろう。

114) 松平齋光は「祭——本質と諸相——」(日光書院・1946)の中で、神の相対性が善神と悪神の対立に反映していること、祭の二元性は神の両面性の投影であることなどを指摘している。

話題が『酒吞童子』から若干外れているが、『酒吞童子』の四天王型の話型を産み出したものが二項対立的世界観であると想像されるために、この世界観の意味するものを追究しているのである。私の問題意識は、四天王と四天王の争いというパターンが何故文学史上に頻出するのか、又、なぜ朝敵は官軍に負けるべく宿命づけられているのか、という点の究明にある。四天王型の話型の最深部に、光を当ててみたいのである。

さて、二項対立図式は、人間の出自に関しても指摘できる。物語文学は、源氏と藤原氏の二つの氏族の葛藤の物語であると解する。神性を有する貴種(源氏・在原氏)と神性のない貴種(藤原氏)の対立という図式が成立するのである。

一体に、世界各国の神話には、神々の二つのグループ同士の争いや、二つのパントエオンの対立というモチーフを持つものが多い。我国には天つ神系と国つ神系という神祇の双分的区分が見られ、この区分はその神々を祖先とする具体的な氏族にまで及んでいる。

三品彰英は、『天つ神族・国つ神族と双分組織』のはしがきの中で、次のように説明する。

このような神祇の分類概念は、原始民族や古代民族の間にみられる、いわゆる双分組織(dual organization)と類似した節々があるように思われる。双分組織とは早期社会に見られる血縁的協同体で、社会組織における氏族(clan)と部族(trib)との中間に位する集団単位であり、最も多くの例では天地・上下あるいはそれを象徴する名目によって血縁的に両分されている。だから双分組織を構成する二つの集団を通常、半族(moiety)と呼び、時には大氏族(big clan)とも呼んでいる。<sup>116)</sup>

異なる世代間の対立、ないし同一世代内の二組の

男系の分裂は、「半族」という用語で説明できるのである。しかし、それらが同一の氏族に統括されていることは重要であろう。一つのもののの中に二つの側面があつて、対立しあうのである。

このような双分的区分を物語世界に当てはめると、どういうことになるか。ある目的をめぐる二人の敵対者が競い合うということが、文学の大きな構造として浮かびあがってくるのである。二人の敵対者は、まるで競技を行なうかの如く、肩を並べている<sup>117)</sup>。

物語文学では、同一世代の中で二人のライヴァルを設定することが多い。光源氏と頭中将、夕霧と柏木、薫と匂宮、というように、『源氏物語』は三代にわたって葛藤しあう。『宇津保物語』が二つの冒頭を有しているのも、仲忠と涼という二人のライヴァルの存在と対応しているのである。『酒吞童子』の頼光と酒吞童子も、広い意味では、この範疇に含めることができよう。

神話においても、二人の神がよく似ているとか<sup>118)</sup>、双生児のかたわれであるとか<sup>119)</sup>、語られることがある。これらは、前述した「半族」の概念とほぼ対応するのである。

注意せねばならぬのは、二つのものの対立といっても、必ず勝つ方が決まっているということだ。朝廷側は、常に朝敵を打ち破る。光源氏は絶えず頭中将を圧倒し、頭中将はひたすら敗北しつづける<sup>120)</sup>。同様にジャータカにおいて、提婆達多是釈迦の風下に立ちつづけねばならぬのである。彼らは互いに親類であり(従兄弟や義兄弟であることが多い)、それゆえ激しく挑み合う。けれども、結局は一方の勝利におわるのである。源頼光は勝ちつづけ、酒吞童子は敗れつづける<sup>121)</sup>。

二項対立的世界観について考察してきた。四天王と四天王の闘い、善神と悪神の争い、一つのヒエラ

115) 伊藤幹治・渡辺欣雄『宴』(弘文堂・1975) 95～96 ページ。

116) 三品彰英『神話と文化史』(三品彰英論文集(3)・平凡社・1971) 117～118 ページ。

117) ロラン・バルトは『物語の構造分析』(花輪光沢・みすず書房・1979) 35 ページで「数多くの物語は、ある獲得目標をめぐる二人の敵対者を争わせており、その結果、両者の「行為」は対等になっている。この場合、主体はまぎれもなく二重で、これをさらに代入によって還元することはできない。(中略) たとえてみれば、物語もまた、ある種の言語のように、人称上の双数を知っていたのだ。この双数は、物語をある種の遊戯構造に近づけるだけに、なおさら興味深い。そうした遊戯では、二人の対等な敵対者が、審判によって送り出された対象を獲得しようとする」を述べている。ただし、「(一に) 還元することはできない」という件りは批判すべきであろう。

118) アメノワカヒコとアヂシキタヒコネは、「此の二柱の神の容姿、甚能く相似たり」(注 62 書・117 ページ) とされている。

119) オオウスとオウス(ヤマトタケル)は双生児であった。

120) ギリシャ神話でも似た状況があり、兄のゼウスは勝ちつづけ、弟のポセイドンは敗れつづける。

121) 酒吞童子は、伊吹山・比叡山・大江山で敗北をつづけ、頼光は、土蜘蛛や酒吞童子に勝利をおさめつづける。



ルキーともう一つのヒエラルキーの対立、朝廷と朝敵の対立なども、当然この世界観の顕現と解されよう。『酒呑童子』を産み出した基盤は、まことに深いものがある。

なお、この二項対立図式を、私の方法論上の重要なテーマである「如意宝」と関連させると、どういうことになるだろうか。簡単に、その見通しを述べておきたい。如意宝は、それを所有すればすべての願いが叶えられる至上の宝物であるから、本来一つだけで用は足りるはずである。ところが、シオミツ玉・シオヒル玉などのように、「二つの玉」という発想の形式が生じてくる。二つの如意宝で一セットなのだ。そして、それらは「陰と陽」などの相反する世界原理を象徴している。この「二つの玉」が「半族」のレベルに、本来の一つだけの如意宝が「氏族」のレベルに、それぞれ該当するのではないかと考えるのである<sup>122)</sup>。対立するライヴァルも「二つの玉」なのであり、二人で一セットとみなされるのみならず、それを同時に掌中におさめる人物（帝王など）が存在するわけである。

#### 4.3 自己ともう一人の自己

一つのものに内在している相反する二つの特性を顕在化させ、葛藤を経て合一するというドラマは、実は一人一人の人間の心の内面においても行われているに違いない。

我々は生きてゆく過程で、様々の選択肢の中からたった一つの可能性しか選び取ることができないのである。我々には、実際には生きえなかったけれども、あるいはそのように生きえたかもしれぬ人生のもう半面というものが必ずあるはずだ。その積み残された、又はかつて自ら否定しきったありうべき人生が、現実の自分の人生と拮抗する時期がいつかやってくる。そのとき、生きえなかった可能性を人格化し、なおかつ他者として外在化して、排出する営みをせざるをえないのである。そうしなければ、現実の自己が存在意義を喪失してしまうからである。このとき、対立し合うのは、自己と他者ではなくて、自己ともう一人の自己なのである。自己と裏返された自己とが、自己と他者の対決を装っている、と言ってもよい。

自らの心の中に沈黙したもう一人の自己が、それを内部に抱えこんでおくにはあまりにも危険である

と判断されたとき、もう一人の自己は、自己の存在を脅かす強敵として外部に排出され、退治される。そのことによって、現在の自己の存在価値が証明されるのである。もう一人の自己、裏返された自己を否定することで、現実の自己が確認される、という仕組みである。政治的に言えば、一つの体制が自己の存在価値を証明しようとするときには、必ず敵対する体制を必要とする、ということだ。そして、『酒呑童子』の発生の根本原因も、この点にこそ見出されるのである。

しかし、敵対者（敵対する自己）を打倒したその時点から、彼の心の内部には生きえなかった人生の可能性がまた新たに沈黙し始める。そしてそれを許容しえなくなったとき、再びそれを排出する営みが必要となってくる。

ヤマトタケルなどのように、一生を戦闘に終始する武将の話は多い。彼は、何故戦いつづけねばならないのか。大和朝廷がある限り、又大和朝廷が自らの支配の正統性のみを主張しつづける限り、反対勢力として朝廷内部に許容できぬ存在を「朝敵」として排斥する作業が、未来永劫なされねばならないからなのである。蓋し、政治に理想性・完全性はありません、ありうべき改革を求める内部批判は不可欠のものなのである。

逆に言えば、反対勢力の消滅（朝敵の一掃）は、体制にとっての最大の危機であることになる。反対勢力を作ることができぬほど、体制が停滞していることを意味しているからである。生きる限り、前進する限り、自己を相対化するもう一人の自己が懐胎するはずである。最後にして最大の敵を退治することで、その英雄ないし体制も衰弱化の道を進むことになった、という事例は数多い<sup>123)</sup>。

『酒呑童子』の主人公・源頼光とその四天王にも、数多くの武勇談が残っている。酒呑童子をはじめとして、土蜘蛛退治、さらには羅生門の鬼の話などがある。これらは、一つの出来事をたびたび変奏して異なる形で発想していると考えられるよりも、繰り返し繰り返し怪物退治をおこなう必要があったことの反映であると見た方がよいのかもしれない。

尤も、敵の消滅が、敵対する自己との「和解」を意味するものであるならば、それは望ましいことである。対立ののちの合一という宗教的ドラマが実現したこ

122) 注 23 の拙稿を参照されたい。そこでは、「半族」という用語は使っていないが、同様のことを述べておいた。

123) 注 111 の拙稿は、光源氏の世界終焉の根本原因を、敵対者柏木の死と絡めて考察しようとしたものである。



とになるからである。朝廷に逆う東夷を敗ったあとで、命を許し故郷へ帰してやる、といったパターンであればよいわけだ。この場合は、永遠の平和がもたらされることになる。

四天王型の話型は、藤原千方の項で見たように、文学史上に簇生している。それは、自己がもう一人の自己と対決する物語としても読みうるのである。そして、『酒呑童子』は、その中で特異な達成を遂げた作品だと見なされるのであった。

## 5. 酒をめぐる

### 5.1 酒をめぐる話型

『酒呑童子』において、「酒」という素材の果たす役割は大きい。鬼王の名前(しゅてん)も酒に因むものであるし、頼光が酒呑童子を討ち取った裏には、神仏から賜った「じんべんきどくしゅ」という酒の効果があつたのである。酒をめぐる話型を簡単に整理することによって、『酒呑童子』の中の酒の使われ方の実態を観察してみようと思う。

酒は、本来人間が神を饗応し、神の心を飲ばすために宴の席で用いるものであった。つまり、

(1)―① 人間→美酒→神

というのが、根幹をなす発想の形式である。ところが、神に対する思いが、畏敬の念から恐怖に変ずるに及び、悪神は退治せねばならぬ対象に転落する。その際に、「酒」で神を酔わせ、正体を失ったところを退治することもあつたのである。スサノオがヤマタノオロチを倒した時には、「八塩折の酒」が使用されている。この場合は、

(1)―② 人間→毒酒→神

と図示できることになる。

ところで、原因と結果は容易に逆転するものである。与える者と与えられる者の立場も又、可逆的であると言える。心がけのよい人間に神が不老不死の薬を授けるという話は、養老の滝伝説をはじめとして少なからず存在している。

(2)―① 神→美酒→人間

というパターンである。それから、(1)―②を逆転すると、

(2)―② 神→毒酒→人間

という図式が得られる。悪人に対する罰として、神が毒酒を与える、というような話が、これに属する

ことになる。

渋川版『酒呑童子』の中の「酒」は、この四つの中のどれに該当するのだろうか。

源頼光は、石清水八幡・住吉明神・熊野権現の化現した三人の翁から「じんべんきどくしゅ」という酒を授かった。

此三人の翁こそここに不思議の酒をもつ。その名をじんべんきどくしゅといひ、神の方便鬼の毒酒とよむ文字ぞかし。此酒鬼が呑ならば、飛行自在の力も失せ、切るとも突く共知まじき。御身たちが此酒を呑めばかへつて薬となる。さてこそ神便鬼毒酒とは後の世までも申すべし。なをなを奇特を見すべし。<sup>124)</sup>

つまり、心がけのよい者には不老不死の良薬となるが、悪人には猛毒となる酒なのである。この酒を酒呑童子に飲ませると、その効果は抜群であつた。この中には、

(2)―① 神→美酒→人間  
というパターン(神=三社の神仏)と、

(1)―② 人間→毒酒→神  
というパターン(神=酒呑童子)とが併存しているのである。同じ酒が、二通りの話型の中で息づいているわけである。なお、頼光は勅使であるから、(2)―①のパターン、山の仙人が勅使に不老不死の酒をこつづけ、天皇に渡すように頼む話とも通底しているだろう<sup>125)</sup>。渋川版『酒呑童子』が天皇色を薄めて武家色を打ち出そうとしていることは前述したが、そのために、この酒を頼光が天皇に差し出す場面が消失してしまっているのである。

渋川版『酒呑童子』では、(2)―①と(1)―②が同時に表現されているところに特色がある。頼光の栄華(成功)と酒呑童子の破滅が、一つの素材によって物語世界に導入されるのだ。

ちなみに、酒呑童子が美女の血を酒と名づけて頼光に飲ませる件りは、

(2)―② 神→毒酒→人間

というパターンに属するものかもしれない。頼光は名将であるから、この程度の毒酒にはひるまなかつたのである。あるいは、「じんべんきどくしゅ」が毒酒であると同時に不老不死の薬でもあつたことと対応しているのかもしれない。この場合は、飲む側の頼光が善を代表する人物であるゆえ、生き血が薬(美

124) 注6書・366ページ。

125) 以前にも、千方説話の拡がりの箇所、このパターンについては言及しておいた。注25の拙稿参照。

酒)に変じたのである、と解されることになる。

酒が薬でもあり毒でもある点に渋川版『酒呑童子』の特質があることを述べきったのであるが、これは成長する『酒呑童子』譚の中で、いつ附加されてきたものなのであろうか。それとも、最初から存在していたものなのであろうか。

『酒呑童子』は、藤原千方伝説を一つの源泉として膨張したものである。千方伝説における「和歌＝如意宝」「和歌＝武器」を変換したのが、『酒呑童子』の「酒＝如意宝」「酒＝武器」だったと推測されるのである。つまり、(1)―⑤のパターンである。この場合、酒は武器として最高の効用を有するものとして使われたはずである。即ち、酒呑童子を打倒する「毒酒」である。実際、『伊吹山酒頭童子』(岩瀬文庫蔵)などでは、三人の神仏が授けたのはただの毒酒だったことになっている<sup>126)</sup>。これが原初形態である。

ところが、四天王型としての均整を獲得した、言わば完成期にあたる『大江山しゆてん童子』(慶応大学図書館蔵)では、

このさけと申は、じんべんきどくしゆ、といふ、  
神のはうべん、おにのどく、人げんのむならば、  
かゝつて、ふううふしの、くすりと、なるべし<sup>127)</sup>

というように、両義性を帯びるに到るのである。(2)―①と(1)―⑤が併存するのだ。このあとで、『酒呑童子』は、四天王型に関しては解体・混乱の道を進るのであるが、「酒」に関しては、既に見てきた如く、渋川版『酒呑童子』も完成形態をよく保存しているのである。

要するに、酒が毒でもあり薬でもあるという発想は、『酒呑童子』に関する限り、後から賦与されたものなのである。しかし、これは発想のレベルとして「酒＝毒」が古く、「酒＝毒＝薬」が新しいということまでは意味してはいない。私は、むしろ逆だろうと思っている。『酒呑童子』はその発展成長段階において、「酒＝毒」という原初形態を通過し、次の段階で「酒」の有する両義性を発見した。この発見によって、「酒」は全き如意宝として本来の機能(不老不死等の

好ましい結果の招来)をも発揮しうることとなったのである。又、酒の用いられる四つの話型のうち二つを複線的に内在させることで、『酒呑童子』という作品を複雑化することにも成功した。発生の順序としては新しいが、意味する実質的内容としては本源に返った、ということなのだ。この点について、節を改めて今少し考察してみることにしたい。

## 5.2 如意宝の両義性

ギリシヤ神話に登場するメドゥーサの左側の血管から採った血は人を殺すけれども、右側の血管の血は死者を蘇せる力を持っていたとされる。これは、第一に、彼女自身(血液の所有者)が生と死を司る地母神であることを示している。しかし、それのみではなく、第二に、同じ人物の「血」が生と死の両義性を兼ね備えていることをも意味しているものであり、「じんべんきどくしゆ」とほぼ照応していることが知られるのである。

如意宝はそれを所有する者に無限の富をもたらすものなのだが、いついかなる場合でもそうなのではない。心がけのよい爺さんにとってのコメクラは「米蔵」であつたが、心がけの悪い爺さんにとってのコメクラは「小盲」でしかなかった<sup>128)</sup>。如意宝は、それを所有する資格のない人物には無益であるばかりか、かえって祟りをなすことすらあるのである<sup>129)</sup>。

如意宝はそれ自体の中にプラスとマイナスの両義性を内包しており、それに働きかける人物に応じた反応を示すのである。

『江戸名所記』の不寝権現の項に、

祇園の牛頭天王の御託宣に、我は眠を好みて五月五日目をさまし、天にあふぎて息をはく。その気霊となり、露となり、雨となり、霧となり、人間の身にふれて、果報にしたがひて、毒ともなり薬ともなる、とのたまへり。<sup>130)</sup>

とあるが、これなどは、如意宝の両義性を端的に示すものである。

『塵滴問答』は、茶について、

茶ハスゴセバ毒トナリ、スゴサマレバ薬トナルト云ヘリ。サレバ、毒薬相交テ生タリ。<sup>131)</sup>

126) 『室町時代物語大成(2)』384 ページには、「各、相構て、露ばかりも、口に入給べからず、毒の酒にて候也」とある。

127) 『室町時代物語大成(3)』153 ページ。

128) 民話の「竜宮童子」のうちのパターンである。柳田国男監修『日本昔話名彙』(日本放送協会・1948)91 ページ。

129) 「舌切雀」などのパターン。同じツツラが、心がけのよい者には善い宝物を、心がけの悪い者には毒虫を現前させる。最初から別々の物がツツラの中に入っていたと考えると、この話の面白さは消えてしまう。

130) 『続々群書類従(8)』727 ページ。

と記し、『世鏡抄』は、酒に関して、

酒ハ不老不死ノ薬。飽ヌレバ必死。定業之毒ト云々。<sup>132)</sup>

と記す。いずれも、「毒=薬」という如意宝の基本概念を言い当てたものと言えよう。「じんべんきどくしゆ」も、かかる範疇に含まれるのである<sup>133)</sup>。

しかしながら、このような両義性を持つ如意宝は、人々の常識を越えていたためか、直接これを素材とするものは少ない。多くの場合は、少しばかり変型したうえで使用しているようである。

『申陽侯絵巻』。李生は申陽侯を射た。傷を負って苦しむ申陽侯の前に何食わぬ顔をして現われた李生は、医者になりすまし、「長生不死」の仙薬を与えるとして偽って猛毒を与え、申陽侯を殺害した<sup>134)</sup>。『酒呑童子』とも通ずるところのある怪物退治の話だが、仙薬が即ち毒でない点、『酒呑童子』の「じんべんきどくしゆ」よりも原型から遠い。

『さくら物語』。継子玉千代丸を嫌悪する継母が目を負傷した。玉千代丸の持参した仙薬を、継母は拒絶する。

きたのかた。つくづく。きゝたまひて。玉千代にこそ。神のきどくも。おはしまして。其しるしも。あるべけれ。われには。かへつて。どくとならめ。<sup>135)</sup>

継母は本気でそう信じているわけではなく、玉千代丸が薬と偽って毒を与えるのではないかと疑っているのである。しかし、そうでありながら、表現は「薬=毒」という如意宝の両義性を言い据えているのである。

毒が変じて薬となる、というのも、原型からの離脱と解される。

『月日の御本地』。これも、継子を毒殺しようとする継母の話である。継子が毒殺されかかっているのを見た千手観音は、それをかわいそうに思った。

くはんをんきやうの、じゆそしよどくやく、しよよくがいしんしや、の二くのげを、いれたま

へば、たちまち、どくやくへんじて、くすりとなり給ふ<sup>136)</sup>

どうも、継子譚に頻出する素材のようである。

『西海余滴集』には、

天竺に伊蘭林と云毒木の林有。四方四十里有と也。彼林中に二葉のせんだん生ずれば、毒変じて薬の林となるといへり。されば、よき師は梅檀のごとし。一木の薬徳を以、多くの毒木をみな薬となす也。いかでか師によらざるべき。<sup>137)</sup>

とある。これなども、「毒木=薬木」のかすかな残像を指摘することができよう。毒木が薬木に変化するのには、毒木の中にわずかではあるが確実に薬の成分が含まれているからなのである。

やや脇道にそれるが、古代人が不老不死の仙薬として飲んでいたものは、現代医学から見ると猛毒であることが多いという。これは、あながち古代人の科学的無知にのみ原因を求めることができないように思う。毒であることを知っており、承知の上で飲んだ、という側面も私には否定しきれないのである。毒でないものが、どうして不老不死の薬たりえよう。如意宝とは、本来そのような両義性を持ち、ある意味で常識を越えたものなのである。毒にも薬にもならぬものほどつまらないものはない。如意宝を所有するにふさわしい人格の高みに達しているならば、両義性を有する如意宝は、「不老不死の薬」としてその人の前にあらわれる、と信ぜられていたのではないだろうか。

## 6. おわりに

御伽草子の代表作『酒呑童子』をめぐる、様々の問題点を解決してきた。とはいうものの、私は、正直なところ、複雑な発生系統を有する『酒呑童子』の極くわずかな数の作品しか目を通してはいないのである。活字化された『酒呑童子』を読みこんで、その結果として、本格的な作品分析のためのモデルを作製してみたのが、この論文なのであった。これ

131) 『続群書類従・32 輯の上』216 ページ。

132) 同前書・289 ページ。

133) 「水」は、神の依り代として重要な素材である。あるときは、ミソギの神水となり、あるときはケガレに触れた汚水ともなる。この点に「じんべんきどくしゆ」の両義性の発生理由が求められるかもしれない。

134) 『室町時代物語大成(7)』449~450 ページ。

135) 『室町時代物語大成(5)』390 ページ。

136) 『室町時代物語大成(9)』383 ページ。『法華経』観世音菩薩普門品の、「呪詛諸毒薬、所欲害身者」という偈である。『近松全集(4)』所収の『用明天王職人鑑』では、墮胎の毒薬が安産の妙薬に変わることを「変毒為薬の仏法」と表現している(146 ページ)。

137) 古典文庫『西海余滴集』(富倉徳次郎校)69 ページ。

を作業仮説として念頭におき、今後『酒呑童子』の諸本を一つでも多く調査してみたい。モデルの正しさが証明されれば何よりであるし、調査によって仮説の変更を余儀なくされることもあるであろう。

『酒呑童子』は、四天王を所有する者同士の争いであって、それは自己がもう一人の自己と出会う物語なのであった。それは裏返された自己を否定し、することで、現に存在している自己の正当性を主張せんとするものである。ところで、この四天王型の話型は、男と男の（つまり、同性間の）葛藤を主題としているのだが、それと類似するもう一つの話型がある。男と女の（異性間の）葛藤を語る物語が存在するのである。

『源氏物語』で言えば、光源氏と六条御息所の関係がそうだし、中世の妬婦譚の典型である『屋代本平家物語』剣巻所収の橋姫伝説なども、夫と前妻の霊との対決を叙している。『橋姫物語』については、

以前簡単に考察したことがあるが<sup>138)</sup>、今回の『酒呑童子』論を踏まえて再度発生基盤を追究する必要があると感じている。

ともあれ、『酒呑童子』のおどろおどろしい外見も一皮むけば『源氏物語』などの伝統的物語と同一のモチーフであることが判明したし、宗教的な二項対立的世界観に裏打ちされていることもわかった。本稿は、論の順序として、表現から話型（原型と言ってもよい）へ、そして話型の内在している意味へと溯行する方法を採用したのだが、実は、同時に、私の脳裡においては、単純な話型が少しずつ雪だるまのように膨張してゆき表現に定着するその過程が再現されていたのである。普遍的な民族の心性が一見すると奇怪な表現を産み出してゆく秘密を私は垣間見たかったのであるし、現に見たように思うのである。

(1986・2・9)

138) 拙稿「伊勢物語の基底——東下りと筒井筒」（『電気通信大学学報』36巻2号・1986・2）参照。